

[よこやま えみこ](#) この話は、大きな声で叫びたいほどの悲しい怒りの感情が出て来ます。認知症の母が入院した時に手足を押さえて検査され、私は病室の外で母のやめてと言う叫びを聞いて我慢して待つしかありませんでした。入院の時も拘束して良いという書面にサインしないと入院させられないと言われ泣きながらサインしました。皆んなに知って欲しい。大切な人が物のように扱われる。

[若野 達也](#) 認知症の活動をはじめるきっかけとなった子供時代がフラッシュバックしてしまいました。あの時の悔しさとか。トラウマになる子供もいる。僕のように。今は、理解できますが、でも、前向きに進んで欲しいし、自分もできることをしていきます^^

[中山早由里](#) クローズアップ現代見ました。オンエア後から、ツイッター等で反論、抗議が多かったとのコメントを読み、残念ですし、心を痛めます。私は以前精神科病院に勤務し、身体拘束という、おぞましい光景に何故？と疑問だらけでした。精神科病院に勤務していた頃に、人権について語ろうものならスタッフからは、「そんな事いうなんて」と冷ややかな反応で、病院長から呼び出され「貴方は医師へ不満があるのか」と聞かれて、(あるさ！)私がおかしいの？そう思わざるを得ない環境の中で、ゆきさんに出会い、私の拙い話やブログに真剣に心を寄せて下さり、本当に救われました。精神科病院時代には「身体拘束は患者さんの生命を守る為の合法」だと、刷り込まされましたが、私は絶対に身体拘束は、合法だと認めたくありません。人権侵害です。何故、非情の世界が生まれ、非情の行動が平然と行われてしまうのか、現状を知るべきだとも思っています。クローズアップ現代のディレクターさんへ、これからも放送は根気よく？続けて行って欲しいと願います。最後に・・・内田病院で、奮闘している素晴らしい田中志子医師にエールを送ります。

[田中 志子](#) [中山早由里](#) さま、ありがとうございます。スタッフと楽しくやっています！ほんと毎日幸せです！

[望月 健](#) [中山早由里](#) さま、ありがとうございます。今回、番組の編集に携わった人は当初「高齢者モノを編集といつも憂鬱になる。長生きはしたくない」と言っていたのですが、ユマニチュードや内田病院の取り組みを取材した映像を見て「患者さんも看護師さんもみんな笑顔で楽しそうなのが新鮮だった」と言っていました。番組に激烈な批判をした方々たちにもぜひ、そういう現場があるし、そう出来るということを知ってもらえればと思っています。

[佐々木 淳](#) 正しいことをしていれば、いずれ主流になるはずです。

[藤田 敦子](#) 「自分がされていやなことはしない」内田病院がされている認知症ケアは本物ですね。

[軍司大輔](#) twitterなどで様々な批判を目にしましたが、感情的なものが多いようです。提供側の責任論に落とし込んだ批判では何も進展しないばかりか、意味のない溝が深まります。正しいことを知る機会となってもらいたところですよ。

[望月健](#) クロ現の再放送は、その週の一番、視聴率が良かった番組が選ばれるのです。これだけNHKやツイッターに批判が殺到している番組ですから、別の番組に差し替えるという判断がなされてもおかしくありませんでした。

しかし、番組のスタッフ(私の“上司”さんたち)は、「きちんと取材した番組なのだから、見ないで批判している人の誤解を解くためにもしっかり見てもらおう」と、まったくひるんでいません。また、NHKに寄せられる医療関係者からの批判の声にも、毅然とした態度で対応をしています。せつかく(!?)これだけ話題になったのだから、「なくしたくても、なくせない」と苦しんでいらっしゃる現場の方がいるなら、そういう方を、先進的な取り組みをしている病院などにお連れして、本当に出来ることはないか、視察してもらおうなど、第3弾の番組に繋げていこうという意見も出ています。さっそく、内田病院に相談したところ、即快諾してくれました。出来ることを少しずつ、しかし、あきらめず、取り組んでいこうと思っています。

[田中 志子](#) 1996年 毎日悔しくて泣いていた29歳の私に今日のことを伝えてあげたい。来る日も来る日も、点滴をするために、抜かれないように縛られている患者さんの身体拘束を解いて回っていた。解いても解いても、患者さんたちは、当時の看護師さんにまた縛られていた。なんでわかってもらえないんだろう。無視されながら。悔しくて悔しくて泣いてた。それでも私は、たった一人で身体拘束廃止に取り組むことをやめなかった。自分の倫理観、医師としての責務が辞めさせなかった。そして、やめられなかった。患者さんを放っておけなかった。

ある日、患者さんが謝りながら拘束を外す私を追視した。
え？この人、意識ある？
他の日、別の患者さんが私に小さな声でありがとうと言った。
え？この人たち、わかっていて縛られている？
驚きと申し訳なさとなんとも言えない切なさで鳥肌が立って後ずさりした。
さらに、頑張れた。

毎日毎日当時の看護師さんたちには無視され続けた。
理事長の娘、余計なことして・・・と言わんばかり。
29歳の私は、悔しくて怖くて辛くて孤独で、たったひとりだった。

でも患者さんと繋がっていた。
一人、また一人スタッフが黙々と解き続ける私に同調し始めた。
嬉しくてまた泣いた。抱き合って泣いた。
やがて半年たった。

私にとって大きな大きな成果だった。
私の医師としての歴史の始まりだった。原点になった。
内田病院は、病院部門が一番初めに拘束を廃止している。
だから 29 歳の泣いていた志子さんへ
暗闇にいた私へ伝えたい。
頑張ってたよかった。
20 年もしたら素晴らしいスタッフに囲まれまくって笑って笑っているよって、NHK が取材に来て全国
に身体拘束を廃止しようって言っているよって、教えたい！
読んでくださってありがとうございました。
TV 見てくださってありがとうございました。

感無量です。